大型論考スタート！

教育者としてのドラッカー(1)

井坂康志

1

人と世の中を自己の目で観察した賢者・吉田兼好は、世界に対してもつべき心構えを簡潔に、「よろづのことはたのむべからず」と述べた。かくも定めなき世においてさえ、人は頼むものを求めてやまない。会社、学校、仲間・・・、つまるところ、誰もが自身でありたいとの強い願いを内に秘めながらも、気づけば周囲の人間を恐れつつ、集団を頼みにする。自己であることが犯罪か何かでもあるようにさえ見える。

なぜか。人と違う何かでありたいが、いざ行動しようとすると社会の側から強いられた枷にとらわれ、次第に鉄の鎖は侵食し、やがて自身であろうなどとの考え自体が忘れ去られてしまう。誰も崇敬しなくなった山奥の祠をそれは思わせる。

やはり兼好の指摘は正しかった。よろづのことはたのむべきではない。よろづのことには自身も当然含まれるであろうから。人として生きる中で、自身であることをあきらめるなら、自然の理路として、どこかから個性を借りてこなければならない。誰もが理解できる借り物の仮面ならば、みんなが似たものにならないほうがどうかしている。人はこうして、仮面をかぶることによって自身であることの孤独を癒しながらも、集団の一部である慰安を手にする。

しかし、ごくまれに、内面の呪縛の所在を一つの命題として指し示す人が現れる。時に芸術家であるかもしれない。歌手であり、詩人であり、画家であるかもしれない。芸術家は、自身であろうとする者にとって、神々の住まう神殿の祭司に等しい。そこで、音楽や絵画に個として対峙し、世の強制的に与えようとしてくる精神のプログラムに断固として抵抗し、世界はそんな狭隘なものではないことを諭すのが芸術の役割である。芸術家は、世の支配的見解に抗戦する。それらを軽蔑する。外からのプログラムを受け取るだけの人生を生きるに値しない人生と呼号する。芸術家の目には、自身に代表される人間の欲求が見えており、かなたからのささやかな呼び声が聞こえている。

むろん誰もがそうなりたいわけではない。だが、のちに述べるようにいくつもの理由で、個のありようや選択のしかたは根本的な変化を強いられる。呪縛から逃れたいならば、ニーチェのいうように、なすべきことは一つである。「自身に対して安易であることをやめさえすればよい」。同時に、アテネの神殿の門に刻まれた「汝自身を知れ」、結果として、「汝自身であれ」と呼び続ける声に改めて耳を傾ける必要がある。

だが、日本のシステムは、早期において人の精神を篭絡するうえでは卓越したレベルに達する。さらにたちが悪いのは、システムの呪縛の内にいるものにとっては、自身ほどの幸福はないと心から思わせる。いや縛られれば縛られるほどに幸福の度合いは劇的に高まっていく。それはほとんど芸術の域とさえいえる。システムからの解放を願うこと自体が無効化されるシステムの中にいるほど、救いのないものはない。

自身を忘れてしまったのがいつであったか。核を失った果実のように。とりあえず形式的には生きているかもしれない。ただ、生きているのと死んでいないとは同義ではない。

問題は、実存的に生きているかどうかである。実存がないなら時間をも喪失する。時間を手にしていないなら、どのような経験をしようと、何を考えようと、歴史的には無意味である。動物や機械に歴史がないのと変わることがない。21 世紀初頭の日本においては、のちの世代によって書かれる歴史の中で、いかに人間が見えないかと歴史家に嘆かれるのを定められた時代になる。建造された建物や設備も 100 年もつものはほとんどないし、誰が建てたかも忘れられる。あの時代に生まれなくてよかったと後世の人たちは安堵するのかもしれない。答えだけあって問いがない時代だからである。

人生の意味を求めたヴィクトール・フランクルは、『夜と霧』のなかで、アウシュヴィッツの地獄において、昨日との連続性を示すものをすべて断ち切られた経験を述べる。だが、彼は一つだけ、マスターキーのごときものを所有していた。問いかけがそれである。選択と決断を可能とするオープンな問いである。あまり言われないことながら、問いこそが解放のための鍵である。遠い角笛である。

2

「日本は豊かな社会であり、国際的にも先進的地位にある。文化も政治も経済も一流国である」。そんな偽りの自己評価ほどに、人を何かに依存させ、腐食させるものはない。現代の異常なほどの自己肯定観——その肯定は、近隣の他国への否定や辺境地域の軽視などと表裏一体である——は、個の内面を集団的規範に臣従させるうえで、絶妙に作用する。そこでは、自身の思考や言語を信頼せず、どこかの誰かがもつ答えらしきものに容易に人を走らせる。同様の極端な他者志向性は、ネット社会で激しく増幅するように見える。

私たちはもっと自身に問うべきである。ネット掲示板に議論を吹っかける前に。自分に質問すべきである。弁明すべきである。誰が自身の操舵主なのか。舵を握るのは誰なのか。現在の自分は何によって形成されてきたのか。自分だと思う自分は本当に自分なのか。自分に問う前にどうしてネット検索してしまうのか。強力な主張をする人、声の大きな人にどうして動かされてしまうのか。グローバル化するほどどうして精神は偏狭になるのか。

誰でも人に助言するのは好きだし、人の言行を論評するのはさらに好きである。時には、どうか。自分に助言し、自分の言行を論評してみるのは。そのいくぶん曲がった人差し指を自分に向けるのは。それだけで高級な知性の所有者のみに許される行為である。同時に、自己に安易であることを拒否するためのごく初歩的な行動でもある。あるいは 300 年前にはいまだ成立さえしていなかった国家の軍隊が、日本の国土の一部を租界とする事実が、精神の自由の妨げとなるかもしれない。だが、それなどは事態のごく一部に過ぎない。自分だと思う自分は本当に自分なのか。本当は奴隷なのではないか。あるささやきが聞こえるならば、その声は自身を救うかもしれない。

だが、いかにして私たちは自身の奥の院を発見しうるのか。しばしば想像する。想像してみる。人の通わなくなった道である。枯草に覆われて、道かどうかも判別できない。山の奥へと続く道の果てに小さな祠がある。何が祀られるのかわからない。暗い木立に覆われた、打ち捨てられた祠である。自身にふたたびいたる道は危険である。苦難でもある。失うものもある。

だからこそ問わなければならない。

教師ドラッカーが説くのはまさにそこである。ドラッカーは問いの人であった。ボブ・

ビュフォードは、ドラッカーと交友をもつ中で、奥の院の声を聴き、従った人であった。彼に対し二つを述べた。あなたがなしとげたものは何であったか。あなたが寄り添ってきたものは何であったか。

何を愛してきたのか。何に心は懐かしくひきつけられてきたのか。問いをもって、精神の履歴書を読み返してみる。一般に使用される履歴書に書かれる出身地、学歴、職歴、賞罰等々をいくら見たところで、人が誰であるかなどわかるものではない。市民として形成された人工物としての自我についてわずかばかりの情報を与えるだけである。意味を持つのは、内面における履歴である。何を思慕し続けてきたのか。何をもって喜びとしてきたか。問いをもって内面で営まれた人生を振り返ってみよ。結果として、自己の精神活動を流れる渓流のごときものはないか。それら人の通わぬ山奥で息も絶え絶えになっていたもう一つの自我を救い出し、高々と自分の頭の上に掲げよという。

ドラッカーは教育者であった。教育者といっても、教育など行わない教育者だった。真の教育者は教育などしない。触発するだけである。あるいはそこにいるだけの場合さえある。優しく笑うだけのことも少なくない。人の精神の底に定礎された根本にリーチし、お仕着せによる重ね着で窒息した精神を麻痺から解放する。真の教育者である。

ある意味で幸いなことに、私にはすぐれた教師が少なからずいる。多くは没後弟子もしくは私淑という形態をとる。ニーチェ、ワーグナー、ベートーヴェン、内村鑑三、石橋湛山などの歴史的な人物がおり、同数程度、存命し親しく交際しつつ精神の教師となってくれた、金森久雄、上田惇生、室田泰弘、奥村宏、武祐一郎、多田治などの教師がいる。

とりわけ至高の教師、それは半ば「歴史上の教師」でありながら、現実的な邂逅を手にすることができた教師、私が出会いを生涯の誇りとしうる教師、厳格でありながらかぎりなく優しく、鈍麻した精神への配慮を第一に考え続けた教師がいる。一人だけいる。

ドラッカーがその人である。

3

私がドラッカーの所説に耳を傾けるにいたった経緯はいくつかのところで書いてきたが、知らない人が多数であろうから説明しておくことにしたい。もの心ついてから経由してきた、一つの切実な観念について述べておく必要がある。

程度の差はあれ、中学から高校にかけての生活空間は尋常ならざる苦痛であった。まして思う存分自信を飛翔させたいと願わずにいられない時節であるだけに、外力によって精神活動が制限されるとき、精神の苦悩ともいうべきものが生じないはずがない。まして、私の両親は教師であったから、早期に教育者と自称する人々が、教育を僭称して悪質な洗脳を行おうとするのに、一切の信頼を置かなくなっていた。

自称教育者たちを貫く原則とは何か。それを始終考えざるをえないところにまで追い詰められた。いったい何なのか。

二つある。一つの格率は、教育者たちは精神的、時に物理的暴力を駆使することによって、教わる者の自我を無化し、空虚化した自我をもって社会的適応を可能とさせようとする。観察するに、方法は異なれども、現在教育と称される活動の８割方の労力は上記の目的のために蕩尽されるだろう。不調和の芽を見出すや、瞬時に摘み取り、全体に屈従させることを無上の喜びとする。

他方の格率は、教育者本人の中に育まれた無力感を、教育される者の内面に着実に移植することにある。うつろな精神によるうつろな植民地を生きるうつろな人々。自称教育者は自身が経てきた社会の不条理や不公平を一般以上に強く内面に受け止めており、かといって自身の力で自己教育をはかるだけの精神的能力に恵まれてはいない。絶望的な無力感が内面生活を腐蝕しており、それらを覆い隠すためにしばしば偉人の発言が美しく引用されるけれども、そんな表面的な取り繕いを喜んで受け入れるのは、馬鹿か嘘つきのいずれかもしくはその両方である。しかも、学校なる均質的な空間以外ではどのような意味においても、価値をもちようもない代物である。かつてオウム事件のあった 1995 年、政治学者の丸山眞男は、日本においてはどのような組織もオウム教団と同類と述べたが、学校こそが先端的な組織と考えてよいであろう。

あえて私の経験から言えば、高校時代三年間私の担任であった教師は、上記の観察においてたぐいまれな素材を提供してくれた。見て取れるのは、人間としての核の絶望的なまでの欠落である。中心をもたない者は周縁をももたない。いきおい現実の把握に致命的齟齬を生ずる。夢想が理性を凌駕する。かくも人間精神の力学的基礎を欠くために、発言は空疎になり、空疎であればあるだけ、陶酔的夢想にしがみつく。迷惑なのは生徒である。

理想的言辞を操るほどに、本人の私生活が物心ともに完全に破たんしており、家庭生活もままならず、まともな人間はだれ一人寄り付かず、指導を受けた者は例外なく、母校に近寄ろうともしない。その教師に伴う事実である。教育が思惑通り成功であった証である。自身が人としてごくわずかな望みさえも達成せずにいるから、あるいは、自己教育に失敗するから、人を教育すること自体に根本的齟齬をきたすのは当然である。

その集積物が、高校までの学校である。あえて私の心情を一言で表現すれば、生徒よりも自身の空白にとらわれ、しかも未来ある少年少女を供物にして、自我の空転を加速させると考えるならば、噴飯物と呼ばずして何と呼ぶのか。

教師が自らを教育するむずかしさは、誰もが経験として知る。教育者は自ら教育されることを拒否する一つの典型である。

だが、私が高校を卒業して、浪人時目にした予備校の教師は、そうではなかった。少なくとも中には大切な問いがあった。問いとは、自らのなすことが学び手にとってどのような意味を持つかという問いである。予備校教師の多くには教職免許をもたないものも少なくない。しかし、上記の問いを発していないと思われる予備校教師は見たことがない。生徒の目線に配慮することによって、教師としての自身を教育していた。同時に、授業を創造的に展開することで、自身の職業的な責任を果たそうとしていた。高校時代の教師の話をほぼすべて失念するが、予備校教師の語ったことで記憶するものは数多い。

少なくとも予備校教師には、思索があった。内的葛藤があった。しかもそれらを隠さなかった。しばしば同僚教師を教室で厳しく批判した。社会における厳しさを一切の手心を加えることなくさらけ出して見せる知的に率直な作法であった。やがて大学に入り、教養課程の教授の中にも、予備校教師に見た真摯な問いかけを講義の中心とする人が何名かいた。学問を修めた恩恵を、若い学徒たちに受け渡そうとするように見えた。ある教師は言った。「授業なんかに真面目に出ているようでは、学問なんかできるはずがない」。口にする言葉には知識人としての逆説があった。あるいは屈託に伴う徳があった。発言の多くは流行遅れのものであったかもしれない。けれども、何か大切なことを、身を挺して伝えよ

うとするのは切実に感じることができた。予備校時代から大学にいたり、先生と心から呼びたい教師に何名か出会うことができたが、私が得た感慨は説明がむずかしい。高校まで、あからさまな暴力の前に屈してきた自分に、知識という名の素朴な武器を与えてくれたのは、そのような教師たちであった。小成に甘んじることなく、逆に共同的な陳腐な圧力に断固として戦いを挑む知識人の姿だった。個としての懊悩と、教師としての気概の間を行きつ戻りつする生身の人間の姿だった。精神の支えを探索しながらも、見いだせず、葛藤の日々を常とする苦悩する人の姿だった。今私も往時の感慨をリアルなものとして理解することができる。私は思うのだが、苦悩と葛藤する姿をそのままに見せる以上の教育はない。

私がなお世界にいくばくかの希望を持ち続けられたのは、彼らのおかげである。若い者にとっての道案内役であり、同時に自身を範とする種類の教師であった。高校時代の教師のような卑しい人間ではなかった。

同様の来歴もあって、私が自身を教導してくれる人を見出したいという願いが尋常ならざるものであったのは間違いない。だが、出版社に入ってからも、容易に満たされることはなかった。多くは生活者として単純であり、自身の最も深い部分との対話を行っているようには見えなかった。むしろ編集者として社外で会う人々が、私に豊かな内容を語り、主張してくれた。私にとって、社会で生きることを教えてくれたのは、仕事で出会った「外の人たち」であった。

ドラッカーに出会ったのはそんな満たされぬ思いの中での偶然だった。金森久雄氏からドラッカーの読者になることを半ば運命的に勧められ、さっそく『経済人の終わり』を手にしたが、いやしくもドラッカーの語った言葉ならば、どのようなものであれ、あるいは咳払いや沈黙であっても、心からの敬意とともに耳を傾けるであろうことを知った。ドラッカーへの私の印象は、信頼というのみでない。心からの畏敬を伴っていた。23年たつ現在も変わらない。

何より、教導者に餓えていた私の心境をそのまま表現すれば、あるいは言い古された表現かもしれないが、ドラッカーは私のために書いてくれたように感じた。発言領域は広く、なかには私が直接的な関心対象としないものもあったが、私がドラッカーの書くもののなかに、自身の心性に反するものを見出したことがない。なぜ心性に反しなかったのかと考えてみるならば、ドラッカー自身が読者を心から信頼していることが紙背から読み取れたためである。ある意味で、ドラッカーは自身のために書いている。自身が理解を切望するために書いている。同時に切願は読者と共有される。読み手とともに考えていこうという姿勢が読み取れ、そのために湧く泉から結ばれたばかりのみずみずしさが文章にしみわたる。インテリが陥りがちな欺瞞や高踏はつゆほども見られない。ドラッカーの文章はある面では高度なレトリックを伴っているけれども、弁論家ではなく、詩人や小説家の駆使する種類の修辞である。

一切の欺瞞が見られないのは、まずドラッカーは自身との率直な対話者だった。自身に正直な文章は、読み手の精神を健やかにし、勇気づける。同時に、書き手でありながら、読者の心に兆す疑問を先んじて掬い取る繊細な聞き手でもあった。高度な修辞もまた、愛情と誠実に貫かれた飾り気のない質朴なものとして提示されている。ドラッカーのヴォイスは強い愛情とともに読者を包む。学生時代経済学を学ぶなかで、そんなヴォイスをつい

ぞ耳にしたことがなかった。哲学者の三木清がシュンペーターを手にしたときに、はじめて人間の登場する経済学を読んだと述べているが、私がドラッカーに対峙したときの印象はあるいはそれ以上であったのかもしれない。

教師としてのドラッカーが私の心にストレートに飛び込んできたのには、いくつかの理由がある。何より人を教えようなど感じていないのがひしひしと伝わってくる。反対に、内心自信がないのに、ポーズだけ高圧的に出てくるような粗野で野蛮な、下品な人格を激しく軽蔑する。小さな世界で威張り腐っている野卑な人々を侮蔑する。ドラッカーの軽蔑する人種とは、私自身の乏しい経験のなかでも、私がほとんど生理的に拒否してきた教師たちの群像を確実に内包していた。ドラッカーの著述スタイルは、私にはゲーテを思い起こさせるが、ゲーテもまたエッカーマンとの対話に見られるように、教えずして教えた人だった。彼には教科書など必要なかった。自身が最高の範例であった。口先だけの軽薄は皆無だった。

同時に、物事の理を一人称で語りつつ、さらにいかなる衒学もなく、最も美しく語るすべを心得ていた。ある面で散文的であるのは免れないながらも、ロマンティックに、かつ詩的に本質をほのめかす手法を心得ていた。書き手としてはもちろん、話し手としても、相談相手としても、対峙する人の目線から入る人だった。それこそが、私自身が渇望しながらも得ることのなかった教育者の条件だった。

24歳の時にドラッカーを知り、書き手と内面的な対話を経ることで、自身の精神がこの上ない力づけを得てきたことは断言できる。少なくとも、ドラッカーのような自由な精神を知って以来、究極のロールモデルを一望しえた思いがした。

ドラッカーが私にとって最高の教師である第二点目は、まさしく個の自由な精神に由来する。反対に言えば、私の軽蔑する教師たちの目指す究極のところは、自身同様、あるいはそれ以上に、他者の精神を不具にする点にあった。ギリシャ神話に登場する醜悪な魔物同様に、旅ゆく人の手足を切り落とすことに喜びを感じる危険なサディストたちである。

ドラッカーは自由な精神の持ち主であり、マネジメントであれ何であれ、自由な精神の表現は、例外なく読む者の心を自由で晴れやかにしてくれる。インテリ特有の不機嫌や無用の悲観は存在しない。反対に、希望と勇気がある。もちろん発言の指し示すところは峻厳であるけれども、いずれも深い次元から湧き出る勇気によって洗われている。自身は、ヨーロッパの不条理から亡命を余儀なくされるなど、デーモンとの闘争を経た人である。怪物を間近に見て、対決してきた人である。苦労を自身の中に内面化し、しかも、読み手にいささかの負担を負わせることなく、自由にしてくれる。自由さ、晴れやかさは、苦悩と血の文字で書かれている。自由を求める者への共感によって書かれている。あらゆる優れた芸術作品の目指すところと同じであり、ドラッカーは言語をもってこの世界をモチーフとした芸術作品を創造した人であった。

しばしば思う。いかに厳粛で緻密であろうとも、人の精神を濃霧に導く思想に教化力は乏しい。最高の賢人ならば、最深の思想を、最も軽快かつ刺激的言語で表現しうる。世の多くの人々はささやかな経験や知性とともに生きる人々であるから。世の人にとって本当に必要なのは、世界をありのままに観察し、熱とともに世を理解させてくれる種類の知識である。知性の仮面を不気味にかぶり、読み手にも仮面を強要する思想ではない。一つの証拠に、ドラッカーを読むと、緊張が解けて、心が軽くなってくる。自然体になる。

教師としてのドラッカーを思うとき、さらりと書かれたように見える一文に、万感の書に比すべき最深奥の力が働いているのを感じる。一見するとただの目玉焼きに見える。けれども、傑出した大手腕によって調理された目玉焼きである。果たしてそうであるかは、誰でも一口に口にしてみればわかる。

繰り返そう。教師としてのドラッカーは、まずもって自身のために書いており、しかも正直に書いている。透明な鏡に映された像を読み手は見る。読み手はただ指し示す先に目をやるだけである。読み手は自らの中にある多様な精神的サブシステムの命ずるままに像を見る。同時に、読み手は自身が何かを教えられたことにさえ気づかない。読み手が見るものは、読み手それぞれによって異なる。自身が探し求めたものを見出したと感じる。強いられもせず、努めてもいない。ドラッカーの示唆によって、読者は自由で調和ある、とらわれなき自身のつくり出す像に出合う。ベートーヴェンの第三番交響曲冒頭のように、何ものにもさえぎられることない疾風のごとき自由の精神が自身の内部から湧出するのを感じる。

私の驚きと幸福はいかばかりのものであったろう。今も熱いフィジカルな感触として思い起こすことができる。28歳の時、ドラッカーの分身と本人から評された上田惇生氏との知遇を得て、親しくさせていただいたことは、この偉大な教師の偉大さをさらに数十倍にした。ドラッカー著作全般が、あえていえば、20世紀の大半を生きた遺言でもあったことを教えてくれたのは上田惇生氏だった。よき教師は、はからずして、教わったものをたんに生徒や読者にとどめておかず、自身の思想的相続人にしてしまうようである。同様の記述がプラトンの『饗宴』に美しく記述されており、古典的真理であることを知ったのはかなりの時日を経て後である。

4

凡百の愚劣な教師と異なり、ドラッカーは語った通りに生きた。あえていえば、教育効果とは、ソクラテスがそうであったように、発言の首尾一貫性や緻密性にあるのではなく、本人の人間的弱みを包含する生き方に依拠するもののように感じられる。さらに言えば、教師本人もまた、深い苦悩と強い葛藤の中に身を置いているのであり、戦い方——時に敗れ方——をもっても、結果として人を教導してしまう。

優れた教育者は、他者の精神を鋳型に入れようとなどはしない。反対である。精神を解放しようとする。しかも、創造的に解放しようとする。考えてみれば難しいことではない。精神とは本来的に自由を志向し、自主的である。ドラッカーの行動の中にどのように見出せるのか。

ドラッカーは、自身が優れた学者でありながら、学者でないことを誇りとしていた。結果としてドラッカーは学界にいささかの遠慮をすることなく、臆することなく自説を述べた。それは精神の独立を維持するうえでのしたたかな戦略であったことに、われわれはもっと驚いていい。ドラッカーが行ったのは、既存知識分野の深化にはなかった。大胆かつ率直に、自身が観察する世界に関心があった。範とするゲーテ『ファウスト第二部』の半神半人リュンケウスの視野だった。リュンケウスを範とする真の観察者、すなわち高次の秩序と美意識をもって世界を観察する者は、著述にあたって専門外の領域であろうとも勇気をもって踏み込まなければならない。結果としてドラッカーはあらゆる学問分野からも

ふさわしい称号を得ることがなかった。「マネジメントの父」と称されながらも、経営学においてさえしかるべき評価を得ていないのは、驚倒すべき事実であろう。

しかし、ドラッカーのような特異な知識人が、20世紀後半から現在にかけての再び実証主義的傾向に全面的に包囲される中でも、名が忘却されずにおり、今なお読み手が途絶えることのないのは、一つの教育上の達成であるように感じられる。確かに職業的な学者であったが、元来自身が没して後も、一つの学派を残そうなどとは考えていなかったし、群生するたんぽぽの花がいつしか綿毛に変容して種子が風に乗って別の土地に運ばれていくように、自身の思想が現実社会の無名の人々に創造的に利用されることを期待していたふしさえある。

現代の非凡な個性がドラッカーを読み受けとめた印象を、小説や自身の組織などに非凡なかたちで適用する例は後を絶たない。その多くが窮屈な日本社会で自身のもつ個性をつぶされていた可能性の高い人々によって担われているのは注目すべき点であるように思われる。以前は極度の闘争の緊張、葛藤の中を生き、やがてドラッカーの発言に耳を傾けることで、精神を解放された人々である。言い換えれば、解放を経験することで、自身が何者であるかを理解した人々である。ドラッカーに出会い、自身の生き方を豊かに定めた私の友人の鬼塚裕司氏は、「ドラッカーに出会わなかったと思うと、今もぞっとしますね」と語ってくれたことがある。少なくとも実感として決して大げさでないのは、私自身の経験からも正確に理解される。

ドラッカーの発言には、厳しさがある。世界を生きるうえで、個の自由や強みを否定するものがあるならば、何であれ一切の容赦はしないという戦闘的な姿勢である。マネジメントもまた自由の保持の一点については、孤独な戦闘の中核を担っていた。ヨーロッパにおける文明史的罪科を目にした一人の観察者として、同様の決意を胸に抱いていた人だった。しかも、マネジメントに歩を進めたのは、ほかならぬ企業活動を通して、人々の実存と自由を解放するために、いかなる犠牲をも厭わぬ決断が内部にあったためであろう。その決断があったために、偉大な仕事が学界からの無視によって迎えられようとも、ドラッカーの精神を動かすことはなかった。それどころか、自分の提出した仕事を足掛かりに、若い研究者が展開を図ることにも寛容だった。ただ、自身の理説が、情報論的に処理され、いささかの実践的努力に置き換えられないことのみを悲しんだ。

ただし、最晩年のドラッカーに面会した私からすれば、学界への評価に無頓着であったことが、知的姿勢を俗的なものとしたわけでないことにはふれないわけにいかない。ドラッカーは哲学者の品位を備えた高貴な思想家だった。世界的なベストセラーをものした人に似つかわしくない素朴な家に住み、古代の哲学者のように華美な調度品を嫌った。自分を信頼し、それ以上に人を信頼していた。それでもなお、青年時代からの自由を希求する姿勢については、全世界を敵に回そうとも譲るつもりのないことはきっぱりしたその表情に表れていた。真の教導者は沈黙をもってしても人を導く。

余談になるが、私にとってのドラッカーを考えるとき、マネジメントはさほど関心に上らなかった。むしろ、企業活動についての説は私の切望するものからはいささか遠いところに位置していたかもしれない。むしろ世界と自己についての迷宮におけるアリアドネの糸をぜひとも手に入れたかった。その点でドラッカーは、他の経営学や経済学などの論者とはどこか違っていた。一般の論者は、世界の変転に取り巻かれているように見えた。世

論や学的臆見などの靄の中にいるように見えた。時には、自己のありのままの見解を隠蔽し、世の求めるところを述べているだけのようにさえ見えた。

対して、ドラッカーは深く沈思黙考しているように見えた。絶望を深い次元で体験するがために、ささやかな人々の中に精神的革命を企図するように見えた。革命すべきものは国家や社会にあるのではなく、個としての認識にあり、いかにすればそこにリーチできるかを考えているように見えた。一般には産業や企業という通俗的影響の行使者と見られているが、私の第一印象は対照的だった。むしろ最も精神的に活動的であるものの、高貴な思想をもって世に問いかけようとする人に見えた。思想や哲学と格闘する人に見えた。

ドラッカーを評価するうえで、まずオーストリア・ハンガリー帝国の消滅を経験しており、二つの時代を生きた人であったことを理解する必要がある。今でこそそう言えるけれども、ドラッカーを読み始めたときは、自分が裏口から入った気がしてならなかった。かなりドラッカーを読み込んでいる人でさえ、マネジメントが正門であると認識するに違いない。だが、ドラッカーの思想を成り立たせている企図を綿密に検討するならば、むしろマネジメントこそが裏玄関であり、文明史的な世界観が正門であることに気づかざるをえなくなる。確かに、ドラッカーの著作群は複雑に織られたじゅうたんであり、さらに複雑な彩色が施されている。だが、生産物を本当に理解しようとするならば、素材をいくら細密に研究しようとも、到達することができない。むしろ、意図の所在を尋ねなければならない。ドラッカーは自身の理説を展開するために、ある面ではマネジメントを利用した人である。マネジメントのような先導的な知識体系がなければ、産業化の進展する時代において、世の注目を得ることは難しかったかもしれない。

私がドラッカーを偉大な教育者と考えるのは、まさにその点にもある。すなわち、ドラッカーは自説の世への訴求のためなら、どんなものでも創造的に利用した。一見簡明に見える自説の中に深遠な生の哲学を織り込んだ。どう読み取るかは、読み手次第である。

真の教育者は、自己のうちにある実存の核ともいうべき、強みをあらゆる人間活動の礎とする。そうしないわけにはいかないのである。なぜなら、強みとは、ゲーテのいう生産的原点であるとともに、個としての稟性の源でもある。強みとは、個を妨害する教育ではなく、個を促進する教育の真のシンボルである。私は予感する。そこでは私の見てきた独善と硬化の教育を打ち破るに足るだけのエネルギーがある。かくも強みが自己のうちに活動しており、社会成立の基盤をなす点を見極めた論者はそう多くはない。

典型的な事例は、しばらく前に私が翻訳したボブ・ビュフォード『ドラッカーと私』のなかに、鮮やかに描かれている。ビュフォードはケーブルテレビ会社経営者としてコンサルティングを通してドラッカーとの知遇を得ているが、もう半分には教会奉仕者への激しい憧憬が生きていた。しかし、ビュフォードのいう人生のファーストハーフにおいては、教会への奉仕の欲求を口にしながらも、事業の成功や富、名声などの追求で、「聖所」からの声に耳を傾けなかったという。しかし、リュンケウス的望楼からビュフォードを明るく眺め、強みと実存の観点から、第二の人生を精神的充実に導いたのはまさしくドラッカーにほかならなかった。結果としてビュフォードは、自社を売却し、メガチャーチのネットワーカーとして名を残すが、ドラッカーによる助言が他の人より深い洞察に準拠していたことをビュフォードは指摘する。ニーチェのいうように、自身であることこそが最大の仕事であるならば、ドラッカーの人生はなんと完全に近かったか。おそらく、人はドラッカ

一の叙述ばかりでなく、生き方からも、それぞれの作法で教育的効果を与えられるであろう。

5

教師としてのドラッカーを見るにあたっては、何よりも自身の生活を形態として見る必要がある。カントが自身の理説を自身の生活をもって表現したように、あるいはそれ以上に、自身の述べるところを生きた思想家であった。自らの生き方を通して、いかなる所説をも上回って、巨大な教化をなした人物であったということもできる。事実、私の直接接したところからしても、自らの卓越を生活全般に適用し、しかも様態にはいささかも誇張や顕示はなかった。同時に、自身を理念の導くところへと生成していった。

ドラッカーの人生は、錯綜した時代的苦悩と変転のただなかにあり、それでも内面的志向性によって貫かれていた。幼年時代と青年時代の深く張られたさまざまな思想的滋養の複合の結果として、いささかの騒がしさもない、静謐の後年の人生は営まれていった。ドラッカーの活動範囲は、産業社会や企業経営という俗世の象徴をなすなかで生成していった。にもかかわらず、いかなる世俗的妥協も精神を拘束することがなかった。自身は、絵画、文学、音楽などの尋常ならざる芸術精神をわがものとして人生を伸長させたが、いささかのディレッタントも混入しなかった。むしろ自身の知的フィールドとして選んだ世界は、一部の隙もなく、真の芸術家にふさわしい、自身の故郷ウィーンの外延として成り立っていた感さえある。知覚や感覚は、全世界に対して開いており、とらわれない素朴な少年の眼をもって、一切の老成を拒否し、精神の解放を伴って、率直な世界観察の結果として紡がれていった。

現在に至ってなお、率直な知性の持ち主が、いかに稀であるかを実感させられる。しかも、素朴な知性は、人生の早期において開花を見ていたのであり、20代のはじめには驚嘆すべきレベルの観察と執筆の原型を提示している。

ドラッカーの知性を早期において開いたのは、多くの 20 世紀の思想家がそうであったのと同じく、業火のごとき試練、すなわちナチズムからの圧迫をもって始まった。同様の観点において、第一大戦という文明の瓦解が、帝国の中心に生を受け幼かった彼の人生行路を変えてしまったことか。生を潰えることとなった同自体の大半の知識人と異なり、いかに純粋な自由への意思が、いかに早くからドラッカーの精神の中に活発な発露を見出していたかは、いくら強調してもし過ぎることのない事実である。

ドラッカーによって示された精神活動は枚挙にいとまなきほどにあるが、日本人にとって強い感化力を伴うものがある。日本美術へのドラッカーの尋常ならざる愛情がそれであるが、趣味や美的感性の発露ととらえる以上の何かを証言するものでなくて何といえようか。白隠、雪舟、尾形光琳、河合玉堂などのドラッカーによって収集された作品をぜひ目にしていただきたい。それらすべてに見ることのできる、個としての自由の精神と宗教的畏敬の結び合う地下水は、純粋な経路をたどって、ドラッカーの知的活動万般を豊かに潤す。ドラッカーの経営学説はもちろん、文明観、技術観などをも根底において浄化し、亡き後にいたっていっそう滔々と湧出している。

日本美術への礼賛は、ドラッカー自身の精神の最深奥で何が行われていたかを白日のもとに晒す。むろんヨーロッパの絵画や音楽芸術などとも美意識を共有していたけれども、

はたして日本美術にいくらかでも類似した鋭敏な感性を保持しえたものがあったかは疑わしい。ドラッカーの精神を根底から培った芸術的表現として、おそらく日本美術の影響力はとほうもなく深遠のものはない。

ドラッカー自身は、私の知る限り、宗教的な発言について、過剰なまで慎重であった。ただし、彼は禅画や観音画などの日本美術を通してのみ、自身の宗教体験を語った。芸術はドラッカーにとって一つの至高存在だった。同様に、日本美術は彼にあって自身の倫理性の源や、意識の覚醒に思いをはせるとき、最も素朴でありながら、最も純粋な形態をとった信仰に近い精神活動を表現していた。1937年にロンドンのギャラリーで、偶然の通り雨を避けて禅画にふれたとき、天上の煌々とした光の柱を想起せざるをえないほどの聖なる喜悦に包まれたことを記す。それほどまでに、純粋かつ孤独な衝動を永続的に自身の内部に育てていった。日本美術は、ドラッカーにあっての最も崇高な神殿だったのであって、関係を見るとき、人間ドラッカーがいかにして自身へと生成していったかを感ずることができる。

日本美術との関係からすれば、日本への関心の端緒であったとともに、初来日の直接の理由であったことも、思索的原点を表現するであろう。同時に、ドラッカーの著作に見ることのできる、戦争と革命の 20 世紀を克服する理念もまた、日本画の中にほぼ完全無欠な形態をとって表れており、同様の稀な予感は、社会生態学者を自任した人生においても、他に類するものを見出しえないほどのものであった。

上記の最深部から湧出する精神的エネルギーのなかに、現実世界への献身を生涯なし続けることのできた原点が存したことはあまり指摘されていない。それらは、ドラッカーの精神をして、一つの成功にとどまることを拒否する性向をもって立ち現れている。常に、はかりしれない高みを目指して力を傾け、一見すると個々別々のような知的領域を同時多発的に手掛けていったようでありながら、中心には烈火の憤激が燃え盛っていた。火は、多くの芸術家の作品がそうであるように、自身の著作の中に、さまざまな形をとって現象していった。

マネジメントもまた例外ではない。経営学説とは、現実世界のために供せられる知識である。ある種の人々は、技能に通暁することをもって、組織を適切に運営しうるのみならず、ときに、名声や富、権力をも手にすることとなる。しかし、現代人の利己的目的とは正反対のものとしてドラッカーがそれらを展開していったのはほぼ指摘されない。というのも、アメリカに渡った時点で目にした産業組織活動とは、実際がほとんど無原則的浅薄さをもってなされており、部分的には成功しつつあるものの、全体として見るならば無残なまでに不完全なものであった。一端には、アメリカ産業社会が、第二次大戦の勝利にもかかわらず、理念への意識をもちあわせておらず、ひとたび社会が安定すると、脆弱な本性をあらわにし始めた時期に重なっていた事実がある。

マネジメントとはドラッカーにとって思想形成の副産物に過ぎなかったのである。

6

彼は歴史と思想によって、現代の特性を冷静に見つめ、現代人のための教訓を適切に導き出すたぐいまれな才能を併せ持っていた。歴史への考察と芸術をはじめとする教養を櫂として、湖上を軽快に滑るいかだのようであった。眼にした現実を、他のどのような学者

や評論家とも異なるものとして提示しながらも、他のどのような学者や評論家よりもわかりやすい言語をもってなされている。もちろん正確な意味合いにおいて、歴史家ではない。技術の専門家でもなければ、経済学者でも社会学者でもない。いかなる分野の専門家でもなく、同時にあらゆる分野を包括する知全体の専門家である。同様の視座をもって、通例の歴史家をはじめとする専門的学知の保持者では到達不能な境地から、一つの観察を率直に提示することができた。

1969年に公刊された『断絶の時代』で提示されたような、時代の熱い空気観と期待、それらと予覚とが融合し、遷移していく様相をかくも見事にとらえた著作物が、それまであったか。確かに、展開される一つひとつの説明は専門家からすれば、根拠においてあいまいさを払拭しきれないかもしれない。しかし、全体としてのリアルな色彩は、時代状況の本質について何よりも雄弁に物語るのではないか。ソ連崩壊後の世界への予期を示した『ポスト資本主義社会』にいたっては、21世紀を支配する本質的諸相についても、強力な説得力をもって指し示すのではないか。しかも、本人の没後も、各自の認識や関心による展開を行動をもってなされることを期待する点で、ドラッカーの成熟した知識人としての到達点を示すものではないか。

ドラッカー自身は、細分化した学知からの批判に生涯晒され続けた論者であった。しかし、終生、特定の学知のなかに自らの武器を見出すことなく、自己自身に立脚した問題関心から芽吹いてくる直感を手放すことがなかった。時代についての展望を示すにあたって、最も信頼しうるのは、自己自身の内面の語る声であり、内面に蔵された武器にほかならない。そこに、業火の歴史をくぐり抜けた者のみの感じうる痛みと、生活者としてのリアリズムが存する。95年に及ぶ長い生涯の中で、悠々自適も、平穏な老年も、自身の責任の遂行の観点から拒否し続けた人だった。

最晩年にいたっても、家族の証言によれば、歴史研究とシェークスピア全集の再読に没頭していたといい、戦線を離脱する意思を一切もたなかったことを示す。ただし、歴史への認識や経験が、単に過去のためだけに向けられるならば、観察者としての意味はない。ドラッカーは自身を未来の機会と課題に向けて利用し続けたのであり、没する半年前に訪れた名もなき日本の青年に対して——すなわち、私である——デジタル技術の伸長がやがてもたらすであろう、真の教育革命について真率に語った事実からも明らかである。

余談になるが、私が2005年にドラッカーのささやかな邸宅を訪れたときの印象について、少しばかり付言することをお許し願いたい。ドラッカーの生活態度は、書かれたものの世界と同様のやはり力強い精神と厳格な姿勢をもって、来訪する人々に最高の範を示してもいた。邸宅に飾り気はなく、しかもこぢんまりしており、何よりドラッカー自身の充足を示していた。古い籐の椅子に腰かけた姿は、真の哲学者を彷彿とさせつつ、同時に、自身の知恵を全世界と喜んで分かち合おうとする精神とを絶妙に表現していた。

自身は、長い生涯において、火の試練を通過したのみでなく、また該博な知と経験の中をも通り抜けてきたのであり、かくして最高度の自己を実現し、自己の命ずるところに忠実に生きてきたのは、かかる姿勢からも明らかだった。他者に緊張と疲労を強いる要因が見当たらなかった。私が感じた印象は一般的な言語表現で伝達することの困難な種類の最たるものである。ヨーロッパ人としての成熟した知識人と、東洋的な広大無辺の霊性の具現者とが同居した人格をそこに見出すことができた。目の前に一個の肉体を伴う実在を目

にするのでないならば、一つの太古のエーテルを漂う謎のような何かにも感じられた。哲人としてのたたずまいは、ギリシャ時代のものでありながら、歴史の共振の結果として偶然現代にかりそめに表れたもののようにも感じられた。はるか昔のヘレニズム文明の再来のように、東西の収斂活動の極点を示すように見えた。

肉身をまとった古く、新しい力の体現者であった。種々の哲学、芸術、歴史を意のままにしながらも、該博な知識を自身の戯れに用いるものではない。辞典を編集するごとき精密な精神とともに、羅列された情報に生命を吹き込むものであり、真に個別的でありながら、真に普遍的な課題を、真に創造的なしかたでわれわれの前に提示する。

第一声は、「本当の変化とはわれわれの意識の変化である」であった。そうなのだ、まさに。ただし他方で、現代社会は近代の世界観に深く呪縛されている。近代の根強い緊縛が強ければ強いほどに、たった一本の釘が緩むだけで、全構造物は崩壊に向かっていく。あたかも、盤石この上なく見えたソヴィエト連邦が、一夜にして消滅していったように。

特徴的なのはその鋼鉄のごとき眼だった。というのは、人間の資質、総じて強みとされるものは、眼をもたないかぎり、灰色の荒廃のなかに沈みゆかざるをえない。強みを適切に見極めつつ、他の一見すると散在する強みと結びつけて、一つの生産的諸力に糾合すること、マネジメントとは、同様の術理を表現する。あえて神秘主義的表現を許していただけるなら、組織による生産性極大化に伴う錬金術の別称にほかならない。

ドラッカーは、一対の眼をもって、新たな文明を創造していこうとした。また、異なる領域と考えられていた二つの精神活動、すなわち、組織と芸術との間に一つの有機的関係性を見出していくことによってなしとげられていた。むろんドラッカーがその関係を発見した最初の人ではない。すでに存在するものであり、むしろごくありふれたものとして日常の中にある。しかし、一般的にそうであるように、真に偉大な発見とは、かかる凡庸な現象の中に、凡庸ならざる関係性を見出し、それらの意識的かつ体系的提示にある。

しばしばマネジメントの機能を説明する際、芸術的な比喩を用いて、想像を絶するまでの錬金術的作為に言及する。音楽におけるオーケストラである。それぞれのパートの固有な力を、それぞれの力強い美的表現力と独立性をもって、総合的かつ高次な音楽世界に展開しうるとき、音楽の精神は、一つのディオニソス的炎を聴く者の精神にともす。音楽とは一つの現実である。それぞれの奏者も、楽譜も、すでに存在する。しかし、音楽における美の実在性とは、個々の資質が総合的昇華を経たとき、虹のようなかりそめのビジョンとして現れる。それを可能とする偉大な音楽家とは、指揮者である。近代以降の音楽の歴史が示すように、美の最高の形態は、偶然によって支配されているのではなく、偉大な芸術的精神による必然によって支配されている。必然こそが、ドラッカーのいう体系としてのマネジメントの一つの境地を指し示す。

7

現代の個を中心とする組織社会は、最初に 20 世紀のアメリカに出現した企業社会に見うるが、ヨーロッパにおけるナチズムの脅威の中を生きたドラッカーの念頭に浮かんだのは、文明の呪縛への強力な白魔術的作用として、上記体系化を利用可能とする着想であったのは間違いのないところである。先のオーケストラにおける芸術的高みを、組織における生産活動に置き換えるならば、まずもって、個の精神的諸力に理念的表現を与える人間

的行為があるとするならば、それは言語にかかわる活動にほかならない。人は自身の自由な精神をまずもって言語を介して表現する。率直に、理性と感情とともに、内的必然にしたがって、言語的に表現する。しかも、言語ほどに身近でありながらその淵源や運用法が謎につつまれているものはない。ドラッカーの経てきたナチス社会にあっては、まずもって、いたるところで言語が魔物に呪縛されており、フランクフルト時代に新聞記者として直視せざるをえなかった現実の最たるものだった。

人は個である限り、言語を介して、内面の現実と対話し、同時に外面における現実を知る。言語こそが個としての最高の精神的力であるとは、ドラッカーの言語の神聖さへの畏敬の念からもうかがい知られる真実である。人は、言語をもって自らの目標を創造し、それに向けた行動をとり、さらに自身を内省する。言語をもって、相互の意思疎通を可能とし、異なる資質をもつものとの協働をなす。個としての精神的諸力と、相互伝達ともに、呪縛されざる自由な言語活動なくして不可能となる。言語が不自由な社会は、利き腕を殺されたヴァイオリン奏者同様に、機能不全であり、理念的一致の不可能となった社会にほかならない。

ドラッカーの示唆した知識社会とは、自由な精神によって、創造的で生産的な力を解放する社会でもある。反対に、私たちが経てきた社会やそれに付随する教育においては、誰も自己自身を自由に語ることもできず、何より率直かつ素朴に語ることを禁じられていた。そこでは、およそごく限られた人々、ごくまれな幸運と才能に恵まれた人しか、自己の個を守りつつ社会活動を送ることは難しかった。あたかも、利き腕を殺すことに尋常ならざる努力と忍耐を費やし、自己をはじめから放棄して、誰かが前もって考えたプログラムに自己を不自然に適応させる。それをもって成功の指標とするような、病的な社会であった。個であろうと志すならば、志が強固であればあるほどに、回復不能な痛手を受け続け、やがて生きることさえあきらめざるをえなくなる社会であった。

ドラッカーの所説が日本人に熱烈に受け入れられてきた事実は、上記の説が真実であることを背面から裏づけている。マネジメントをはじめとする言説とは、不毛の荒野に鳴り響く、出エジプトへの誘いの角笛だった。あらゆる疎外、不信、無理解、自己蔑視、卑屈からの解放を願う、心の叫びでもあった。ドラッカーが日本美術に目を止めたのは、ほかならぬ現代日本にとっての出エジプトの角笛、民を自由にする捷径が、実は日本の歴史文化の中に静かに伏流する事実の暗示も含まれていたはずである。日本美術ばかりではない。渋沢栄一をはじめとする先覚者としての日本人の称揚もまたかかる真意と一衣帯水であったに違いない。

対して、高度成長していた60年代から90年代はじめあたりまでの日本社会は、他国から分際を超えた文物をもって、自身の裸体を醜く覆ってきただけであったように感じられる。バブル期の日本は、植民地人に見られる、見かけだけのうつろな祝祭だった。深く傷ついた内面、破砕された矜持を、ありあわせの傲慢な仮面で糊塗しただけの一時期だった。あるいは幸いなことにというべきか、祝祭は長くは続かなかった。失われた20年とも30年ともいわれる、覆いの取り除かれた時代が訪れ、日本人は深く傷ついていただけだという灰色の現実を直視することになった。いや、高度成長のはるか以前から、日本人は深く傷ついていた。また、ある意味では当然だが、教育もまた社会システムの派生物にほかならず、教育には、自身の意思をもって形成していく自由の精神が絶望的に欠落しており、

しかもそれらを生み育んだのは、現在犠牲を強いられている人々がまだ生まれてさえいなかった時代の人々の屈従による。教育とは成果を確認するのに、著しく長期を要するために、構造的に時代遅れが恒常化する。

現在のところ、いまだ日本社会は外観に固着しており、少なくとも仮象の自己像にとらわれているように見える。仮面の内部はうつろな闇である。おそらく、うつろな空洞が露見し、誰の目にも明らかになったときこそが、そこに充実した真の精神が流入すべき好機である。人は騙せても自分を騙すことはできない。もっと掘れ。歴史を、文化を。自由の本流の噴き出すまで。個の自由なリズムとともに。無尽蔵の精神的諸力が、欺瞞によって隠されてきた器を満たすべき時期がやがてやってくる。

現在真に生きようとするものなら、角笛の音がはるかかなたより聞こえていなければならない。自己自身でありたいとの、いまだ精神を穢されていない人々は、メッセージに気づいている。すなわち、日本人が古来より文化として育んできた、運動、美意識、自由、慣習、それらが目で見てわかる形態を求めている。ありがたいことに、集団的な欺瞞によって、自由を阻害し続けることは、物理的にも技術的にもできそうもない。今、呼びかけを、自身への呼びかけと感じる人々は多く存在する。数はますます増大する。マネジメントの学者として、遠く感じていた一個の自由教育者として、あるいは政治教育者として、私たちの眼前に立っている。あたかも、『もしドラ』の主人公、高校野球の女子マネージャーのみなみが、ドラッカーの呼びかけを、自身の固有の環境に適用し信じがたい力を獲得したように、理解力ある人々は、自身の置かれた場所でドラッカーを創造的に利用しようとする。かくも、ドラッカーの内部に収斂された古い思想が、新たな形態をまとって、自身を創造的に示現すると同時に、恥ずべき欺瞞的な勢力の卑劣さを白日のもとに晒す。野蛮な同調圧力の所在を探索し、卑怯さを明らかにし——卑しさは、人目にさらすだけで、効力を失うから滅却は容易である——自身を個として生成しつつ、世に役立てていくべく、人と世を解放していこうとする。

自身の内的直観は、すでにネットを含む社会のいたるところに隠れようもなく表れている。それに気づかず、あえて視覚を冬眠させるなら、ほとんど自我のレベルでは集団的な犬死に等しかった前世代と同様に、生に仕えず、生きながら死に仕えている。

しかし私は悲観しない。内的直観の多くは、理由のない怒りや、不条理への感覚を経由して、次になすべきことを教えてくれる。しかし、江戸時代の農民一揆以上のものをなしとげようとするのに、現代ほど精神的武器に恵まれた時代はない。否定のための否定ではなく、自我を呪縛の犠牲から解き放とうとするなら、だれでも参加しうる、歴史上最も費用の掛からない革命運動になる。条件は限りなく容易である。自身の浪費を断固として拒否する。自身が、自由な自我の敵ではなく、味方であることを公言し、内的確信に従って行動しさえすればよい。

上記こそが、マネジメントを介して伝えようとした最も静謐にして最も過激な思想であった。遠いところから聞こえてくるように思われるが、しかし、かすかながら、確実な遠い角笛である。

(2)につづく